



この頁は読者のために開放してあります。  
酪農関係のご質問、ご感想、本誌に対するご意見、或は経営の概要、試作試験、地方のニュースなど、どしどしお寄せ下さい。  
ご質問以外の掲載分には粗品を呈いたします。  
(係)

問 秋も深まり牧草畑の周囲は乾草の山がたくさん揃って夕日に影をなびかす今日この頃です。(中略)ところで私も乳牛を飼育してからもう八年目になりましたが、頭数が増加するに従って必要となることは経営面積と飼育頭数の関係です。  
それで現在酪農のみに使用している土地は六畝で成牛六頭あります。一頭平均一畝ですが、十月号の読者のページですと、内地でのデーターでしようが一五〇〜二〇〇畝で搾乳牛一頭一年間飼養出来る事が可能となっておりますが、北海道ですとどのくらいのデーターがでておりますか。

またどのような飼料作物を栽培したら良いのですか。以上の事について御答え下さい。(上川郡東川町東十二号 高田征雄)  
答 北海道の飼料面積について、統計的数値は見当たりませんが、凡そ乳牛一頭当り八〇〜一畝と考えられます。しかし、道内でも石狩管内のように、五〇畝前後でまかなっている地域もあり、最も小面積の例では一頭当り三〇畝(狩太、木島さん)のところもあります。

乳牛頭数が多くなると、飼料栽培は作業労力の省力化、付作の単純化をはからねば

	年間必要量												所要面積 ヘクタール	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
サイレージ													7,625	15.3
乾草													2,620	20.8
根菜													4,300	7.5
放牧(青刈)													4,500	7.2
														(1~2)

量を想定しなければなりません。高田さんの場合はいかがでしょう。私共はおよそどの作物についても、栽培基準に従って行

なりませんから、単に面積をきりつめることだけを考えないで、飼料作物の生産費の面から、粗飼料給与計画と栽培計画を立てるのが妥当であろうと思います。  
そこで、いま仮に、次の飼料給与例を考えてみましょう。図表をのぞいて下さい。  
ここで、サイレージは減耗二割と考へ、乾草は生牧草の五分の一と見なして算出したわけでは、飼料作物の一〇畝当り収

冬	10月中旬~5月中旬	215日間	1日当日数
サイレージ	25 <sup>kg</sup> × 215 =	5,375 <sup>kg</sup>	
乾草	8 × 215 =	1,720	
根菜	20 × 215 =	4,300	
夏	5月中旬~10月中旬	150日間	
サイレージ	15 × 150 =	2,250	
乾草	6 × 150 =	900	
放牧	30 × 150 =	4,500	
年間必要量と原料必要量			
			(原料)
サイレージ	7,625 <sup>kg</sup> × 1.2 =	9,150 <sup>kg</sup>	
乾草	2,620 × 5 =	13,100	
根菜		4,300	
放牧		4,500	

なった場合、一〇畝当り六トを見ています。従って、飼料面積は全面積合計で一頭当たり五〇畝あれば良いこととなります。これは石狩管内の面積と、ちょうど一致したわけで、石狩管内では、恐らくこのような給与形態をとっている酪農家が多いのではないのでしょうか。むろん、栽培が上手になれば、収量は向上し、それだけ面積を縮小できます。全道飼料栽培奨励会で、優秀な成績を挙げている人達は、各作物とも一〇畝当り一〇ト以上収穫しています。  
ところで、飼料作物の選定ですが、先ずサイレージは、デントコーンまたは混播牧草を用いるわけで、普通はデントコーンのみの場合が多いのですが、栄養の均衡を考慮すれば、冬期間はグラスサイレージ、夏期間はコーンサイレージとすべきでしょう。ただし、グラスサイレージは、失効例が比較的多いので、計画に狂いを生じることがあるかも知れません。  
牧草地は、乾草専用の採草地と、放牧専用に分け、それぞれ混播草種

	(所要面積)
サイレージ	9,150 ÷ 6,000 = 15.3 <sup>ト</sup>
乾草	13,100 ÷ 6,000 = 20.8
根菜	4,300 ÷ 6,000 = 7.5
放牧	4,300 ÷ 6,000 = 7.2
計	50.8

を、土壌によって決めます。一般的な例をあげますと

- 採草地
- 赤クローバー
- チモン
- オーチャード
- ルーサン
- アルサイククローバー
- 放牧地
- ラデノクローバー
- オーチャード
- メドウフェスク

右のようになりましょう。次に、根菜は上川地方では勿論家畜ビートになります。が、十月中旬から一、二ヵ月間は、ビートトップの利用期で、実際の根菜給与はその後になります。逆に、三月以降に於ては、ビート貯蔵中の腐敗損失を見込んでおかなければなりません。  
さて、以上で、年間の給与形態がどのい、飼料畑の計画ができたわけですが、ここで不安な点は、放牧地の草生と採食量の問題です。乳牛の採食量は、一時間に一〇畝当り収量の一%と想定して良いのですが、しかし五月及び九月以降の草生は緩慢ですから、果して、計画量食ってくれるかどうか、また過放牧は絶対につしまなければならぬので、概して、この頃に飼料不足を来たすこととなります。従って、放牧面積に余裕を持つておくこと。それが不可能ならば、青刈用作物や家畜カブ等、いわゆるツナギ飼料の面積を、一頭当り一〜二ト準備することになります。

(上野幌育種場・兼子)